

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第4289550号
(P4289550)

(45) 発行日 平成21年7月1日(2009.7.1)

(24) 登録日 平成21年4月10日(2009.4.10)

(51) Int.Cl.

A 4 7 B 13/00 (2006.01)

F 1

A 4 7 B 13/00

Z

請求項の数 3 (全 16 頁)

(21) 出願番号 特願2003-328470 (P2003-328470)
 (22) 出願日 平成15年9月19日(2003.9.19)
 (65) 公開番号 特開2005-87625 (P2005-87625A)
 (43) 公開日 平成17年4月7日(2005.4.7)
 審査請求日 平成17年5月24日(2005.5.24)

(73) 特許権者 000139780
 株式会社イトーキ
 大阪府大阪市城東区今福東1丁目4番12号
 (74) 代理人 100079131
 弁理士 石井 暁夫
 (74) 代理人 100096747
 弁理士 東野 正
 (74) 代理人 100099966
 弁理士 西 博幸
 (72) 発明者 西澤 崇爾
 大阪市城東区今福東1丁目4番12号 株式会社イトーキクレビオ 内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 机

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

天板と、この天板の縁部を支持する脚を備えており、前記脚を、前後の縦フレームを有する側面視口字状又は門形に形成し、前後の縦フレームで挟まれた空間に、脚に取り付くブラケット手段を介して付属物を配置している、
 という机であって、

前記脚における縦フレームの内周側の部分に、機の正面視で左右外側に張り出したフランジが形成されており、前記フランジに取り付けた前記ブラケットに付属物を取り付けている、
 机。

【請求項2】

天板と、この天板の縁部を支持する脚を備えており、前記脚は、前後の縦フレームとこれらに連結した水平フレームとで側面視口字状又は門型に形成されており、前後の縦フレームで挟まれた空間に、脚に取り付くブラケット手段を介して付属物を配置している、
 という机であって、

前記水平フレームの内周側の部分に、機の正面視で左右外側に張り出したフランジが形成されており、前記フランジに取り付けた前記ブラケットに付属物を取り付けている、
 机。

【請求項3】

前記フレームは、フランジを含む内周部の左右幅寸法が外周側の左右幅寸法よりも小さ

くなるように形成されている、

請求項 1 又は請求項 2 に記載した机。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、机（テーブル）に関するものである。

【背景技術】

【0002】

机は、一般に天板を脚で支持した形態になっている。天板の形態は矩形状には限らず、平面視 L 字状のようないわゆる異形天板も広く使用されている。他方、脚の形態も様々であり、側面視コ字状のものや門形のもの、或いは単なる棒状又は板状のものなど、様々な形態が採用されている。

10

【0003】

他方、机には様々な付属物が使用される。例えば、棚やキャビネットのような整理用・収納用什器、目隠し用又は書類ピンナップ用のサイドパネルなどである。棚は一般に机上に設置されており、他方、キャビネットは袖キャビネットとして天板の下方の床に独立して設置することが多い。サイドパネルは天板にブラケットを介して取り付けることが多い。

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

20

【0004】

ところで、机において脚の周辺部がデッドスペースになることがある。しかし、従来、脚の周辺のデッドスペースを有効利用しようとする発想は殆ど見られていない。

【0005】

本発明は、このような現状を改善すべく成されたもので、新規で有用な机を提供することを課題とするものである。

【課題を解決するための手段】

【0006】

請求項 1 の発明では、天板と、この天板の縁部を支持する脚を備えており、前記脚を、前後の縦フレームを有する側面視口字状又は門形に形成し、前後の縦フレームで挟まれた空間に、脚に取り付くブラケット手段を介して付属物を配置している、という机において、前記脚における縦フレームの内周側の部分に、機の正面視で左右外側に張り出したフランジが形成されており、前記フランジに取り付けた前記ブラケットに付属物を取り付けている。

30

【0007】

請求項 2 の発明は、天板と、この天板の縁部を支持する脚を備えており、前記脚は、前後の縦フレームとこれらに連結した水平フレームとで側面視口字状又は門型に形成されており、前後の縦フレームで挟まれた空間に、脚に取り付くブラケット手段を介して付属物を配置している、という机において、前記水平フレームの内周側の部分に、機の正面視で左右外側に張り出したフランジが形成されており、前記フランジに取り付けた前記ブラケットに付属物を取り付けている。

40

【0008】

請求項 3 の発明では、請求項 1 又は 2 において、前記フレームは、フランジを含む内周部の左右幅寸法が外周側の左右幅寸法よりも小さくなるように形成されている。

なお、付属物の種類には特に限定はないが、例えば、棚と収納箱とパネル類との中の何れかが挙げられる。これらは机と共に使用される頻度が高い。サーバやハブ、ルータ等の情報通信機器の配置に利用することもできる。

【発明の効果】

【0009】

本願発明によると、机の脚の箇所の空間を物品の収納や配置等に利用できるため、スベ

50

ースを有効利用できる。そして、付属物は脚に取り付くブラケット手段を介して配置されるため、ずれ動くことはなくて姿勢や位置の保持性に優れているが、この場合、脚は前後の縦フレーム（支柱部）を備えているため、付属物を取り付けることによって天板の支持機能が低下することはない。すなわち、机としての強度低下を招来することなく、スペースを有効利用できるのである。

【 0 0 1 0 】

また、本願発明では、ブラケット手段は脚を構成するフレームのフランジに取り付けるため、脚にねじ穴等を設ける必要がなくて美観に優れている。請求項 3 のように構成すると、ブラケット手段は脚で囲われた空間内に入り込んだ状態になるため、ブラケット手段をコンパクト化できて、この面からも体裁が良い。

10

【発明を実施するための最良の形態】

【 0 0 1 1 】

以下、本発明の実施形態を図面に基づいて説明する。

【 0 0 1 2 】

図 1 は机の概略斜視図であり、机は、天板 2 と、左右の脚 3 とを備えている。脚 3 は、前後一对の縦フレーム 3 a と上下の水平フレーム 3 b とで側面視口字状に形成されており、各フレーム 3 a , 3 b で囲われた空間内には、付属物の一例としての収納箱 B が配置されている。収納箱 B は、上水平フレーム 3 b に固定されたブラケット手段 C を介して吊支されている。

【 0 0 1 3 】

20

図示の収納箱 B は机の内外両方向に広がっているが、外側のみに広がった形態としたり、机の内側のみに入り込んだ形態としたり、或いは、脚 3 と略同じ幅寸法に設定したりすることも可能であり、要は、目的に合わせて配置態様や大きさを設定したら良い。

【 0 0 1 4 】

(1). 机の基本構造（図 2 ～ 図 9 ）

収納箱 B の吊支態様を説明するに先立って、まず、机 1 の基本的な構造を図 2 ～ 図 9 に基づいて説明する。

【 0 0 1 5 】

図 2 (a) は机 1 の全体平面図、図 2 (b) は正面図、図 2 (c) は側面図である。図 3 は図 2 (a) の III-III 視一部切欠き正面図、図 4 は図 2 (a) の IV-IV 視一部切欠き側断面図、図 5 は連結手段の各部品の斜視図、図 6 は脚 3 のコーナー部の要部断面図、図 7 (a) は脚 3 における縦フレーム 3 a の平断面図、図 7 (b) は脚 3 における水平フレーム 3 b の正断面図、図 8 は脚 3 の縦フレーム 3 a と水平フレーム 3 b とを連結するための継手部材 4 の斜視図である。なお、図 6 において連結体 5 の断面表示（ハッチング）は省略している。。）。

30

【 0 0 1 6 】

天板 1 は木製であり、脚 3 で支持されている。図 1 に示すように、脚 3 は、左右の縦フレーム 3 a と上下の水平フレームとから成る側面視口字状に形成されている。脚 3 を構成する各フレーム 3 a , 3 b は、アルミ等の軽金属の押し出し加工品である（もちろん、両者とも他の素材製でもよい。）。例えば図 2 (b) (c) に示すように、各脚体 3 と天板 2 とは連結手段 A で固定されている。継手部材 4 はアルミダイキャスト製でブロック状に形成されている。

40

【 0 0 1 7 】

まず、図 7 に基づいて脚 3 の縦フレーム 3 a 及び水平部材 3 b について説明する。縦フレーム 3 a は矩形状の中空筒部 4 0 を有していて外周面は外周部材 4 1 で構成されて内周面は内周部材 4 2 で構成されている。内周部材 4 2 には左右に張り出す内フランジ 4 2 a を設けている。

【 0 0 1 8 】

縦フレーム 3 a における外周部材 4 1 の寸法 W 1 は、内周部材 4 2 の幅寸法 W 2 より若干大きく設定されている。また、中空筒部 4 0 の幅寸法は内周部材 4 2 の幅寸法 W 2 より

50

も小さく形成され、幅方向の中心線を挟んで対称形状である。そして、中空部 40 の内部には、雄ねじ 51 , 52 を螺着できる断面Ω状または筒状のリブ部 40 a , 40 b が一体的に形成されている。

【 0019 】

水平フレーム 3 b は略 T 字状の中空筒部 43 を有し、外周面は外周部材 45 が構成されて内周面は内周部材 45 で構成されている。内周部材 45 は左右に張り出す内フランジ 45 a を備えている。そして、外周部材 44 の寸法 W1 は、内周部材 45 の幅寸法 W2 より若干大きい寸法に設定されている。

【 0020 】

図 4 参照に示すように、縦フレーム 3 a 及び水平フレーム 3 b の長手方向の両端面は、長手軸線に対して 45 度の角度で切断した突き合わせ端面 32 , 33 が形成されている。

10

【 0021 】

他方、継手部材 4 は、図 4 , 6 , 8 に示すように、前記縦フレーム 3 a における中空筒部 40 にきっちりと嵌入する縦アーム 46 と、水平フレーム 3 b における中空筒部 43 にきっちりと嵌入する横アーム 47 と、両アーム 46 , 47 の付け根部となるコーナ基部 49 とが一体的に形成された構成になっている。

【 0022 】

縦アーム 46 には、継手部材 4 の外角面側（コーナ基部 49 の外角面側）から雄ねじ 51 , 52 を挿通可能なネジ挿通孔 56 , 57 が穿設形成されている（図 6 参照）。

【 0023 】

20

他方、継手部材 4 の横アーム 47 は断面略 T 字状に形成されており、脚 3 を構成する縦長部材 3 b における略 T 字状の中空筒部 43 （図 7 参照）に嵌まっている。また、図 8 から理解できるように、横アーム 47 の外面には、軽量化のために部分的に凹所が形成されている。

【 0024 】

図 6 , 8 に示すように、横アーム 47 の上下面側には、脚 3 における水平フレーム 3 b の内周部材 45 側または外周部材 44 側から雄ねじ 53 , 54 をネジ締着できる雌ねじ部 58 が形成されている。また、継手部材 4 における横アーム 47 の上部側フランジ部分 47 a には、後述する台座体 6 に対する皿ネジ 10 及び連結体 5 に対するボルト 11 を締結するための雌ねじ部 59 が形成されている。

30

【 0025 】

図 6 参照に示すように、下端水平フレーム 3 b に継手部材 4 の横アーム 47 を嵌挿した状態では、アジャスタボルト 55 は下部の水平フレーム 3 b における外周部材 44 を貫通して継手部材 4 にねじ込まれる。

【 0026 】

図 4 及び図 8 に示すように、継手部材 4 におけるコーナ基部 49 の表裏側面から両アーム 46 , 47 の付け根部の表裏側面にわたって、45 度の角度で鍔片 48 が一体的に突出形成されている。

【 0027 】

脚体 3 の組立順序としては、まず、各縦フレーム 3 a の上下の突き合わせ端面 32 , 33 側（開口側）から継手部材 4 の縦アーム 46 を中空筒部 40 内に嵌挿し、前記鍔片 48 の片面を縦フレーム 3 a の上下の突き合わせ端面 32 , 33 に密に当接する。

40

【 0028 】

次いで、継手部材 4 におけるコーナ基部 49 の外角側からネジ挿通孔 56 , 57 に雄ねじ 51 , 52 を挿通し、縦フレーム 3 a におけるリブ部 40 a , 40 b に螺着して固定する。

【 0029 】

次いで、各継手部材 4 の横アーム 47 を上下の水平フレーム 3 b の中空筒部 43 にそれぞれ嵌挿し、その突き合わせ端面 32 , 33 と鍔片 48 の他面とを密に当接させた状態で、上部の水平フレーム 3 b の内周部材 45 に穿設された孔を介して複数の雄ねじ 53 を横

50

アーム 4 7 の雌ねじ部 5 8 にねじ込む一方、下部の水平フレーム 3 b の箇所では、その外周部材 4 4 から、継手部材 4 における横アーム 4 7 の雌ねじ部 5 8 , 5 9 に雄ねじ 5 4 をねじ込む。

【 0 0 3 0 】

このようにして、一对ずつの縦フレーム 3 a と上下水平フレーム 3 b とを継手部材 4 で連結することにより、脚体 3 を側面視で口の字状に形成する。

【 0 0 3 1 】

例えば図 4 に示すように、脚体 3 と机天板 2 とを連結するための連結手段 A は、所定高さの連結体 5 と、所定高さの台座体 6 と、机天板 2 の下面に固定する固定用ブロック体 7 と、一对のサポートピン 9 と複数のボルト等で構成されている。

【 0 0 3 2 】

台座体 6 はアルミダイキャスト製で平面視略四角状の偏平状であって、図 6 に示すように、台座体 6 の中央部には、脚体 3 における上端水平フレーム 3 b 等に螺着する皿ネジ（皿ビス）1 0 のための座ぐり孔が形成されており、また、台座体 6 の四方外周には、後述する連結体 5 を上方から止着（固定）するための六角穴付きボルト 1 1 が挿通している。台座体 6 の下面には、一对の位置決めダボ 6 c が突設されている（図 6 参照）。

【 0 0 3 3 】

固定用ブロック体 7 はアルミダイキャスト製であり、図 4 , 図 5 に示すように、平面視略矩形状の本体 7 a とその上端に一体的に連設された取付け板部 7 b とからなる。取付け板部 7 b の上面には、天板 2 の下面に形成された位置決め凹所 1 2 に嵌入する一对の位置決め用ボス 7 c が形成されている。

【 0 0 3 4 】

固定用ブロック体 7 の本体 7 a には、その下部側に下向きに開放された大径孔 1 3 a が穿設されており、この大径孔 1 3 a の上端に連通して小径のボルト取付け孔 1 3 b が上面にまで貫通する状態に形成されている。図 4 に示すように、大径孔 1 3 a には固定用ボルト 2 0 が下方から挿入されており、この固定用ボルト 2 0 は、ボルト取付け孔 1 3 b を貫通して上向きに突出し、机天板 2 の下面に予め埋め込まれた鬼目ナット 3 5 にねじ込まれている。

【 0 0 3 5 】

また、図 4 に示すように、固定用ブロック体 7 における本体 7 a の外側の一对の対向する縦側面には、後述する一对のサポートピン 9 の截頭円錐状頭部 9 a が当接し得る截頭円錐状の当接部 1 4 が、前記大径 1 3 a に連通するように凹み形成されている。

【 0 0 3 6 】

連結体 5 はアルミダイキャスト製であり、図 3 ~ 図 5 に示すように、基部 5 a と、該基部 5 a から上面が水平に延びるアーム部 5 b とからなる。基部 5 a の上面には、固定用ブロック体 7 の取付け板部 7 b が嵌まる凹所 1 5 と、固定用ブロック体 7 の本体 7 a が嵌入可能な四角状の取付け凹所 1 6 とが連通して形成されており、さらに、一对のサポートピン 9 がそれぞれ水平方向に嵌入可能な横孔 1 7 が、取付け凹所 1 6 に連通するように穿設形成されている。

【 0 0 3 7 】

なお、連結体 5 の取付け凹所 1 6 は、基部 5 a を上下に貫通するように形成されていても良い。

【 0 0 3 8 】

連結体 5 における各横孔 1 7 の外周には、各サポートピン 9 の横向き円柱状の胴部 9 b の外周にて軸線方向に延びるように形成された突条 9 d（図 5 参照）が嵌まる回止め溝（図示せず）を複数箇所に形成している。

【 0 0 3 9 】

図 4 に示すように、一方のサポートピン 9 の円柱状の胴部 9 b の中心線に沿った貫通孔 9 c に、締着ボルト（六角穴付きボルト）8 の軸部及び頭部が回動自在に支持されている。そして、他方のサポートピン 9 には、その中心線に沿って雌ねじが形成されており、こ

10

20

30

40

50

の雌ねじに締着ボルト 8 がねじ込まれている。

【 0 0 4 0 】

図 3 から理解できるように、連結体 5 におけるアーム部 5 b の上面は基部 5 a の上面と同一平面上にあり、またアーム部 5 b は、基部 5 a に近い側の上下寸法が大きくて先端（自由端）に行くに従って上下高さ寸法が小さくなるように下面が傾斜しており、従って、アーム部 5 b は正面視で略三角形状に形成されている。

【 0 0 4 1 】

そして、アーム部 5 b の先端寄り部位には、机天板 2 の下面に固定するボルト 2 1 の軸部を挿通できる孔が貫通している。後述する横ビーム材 2 3 を使用しないとき、天板 2 の下方の下肢領域空間をより広くするため、前述のように、アーム部 5 b はその下面が傾斜して先端寄り部位の高さ寸法が小さく形成されている。

10

【 0 0 4 2 】

図 2 (a) (b) に示すように、左右の脚体 3 の上部間は横ビーム材 2 3 を介して連結され、横ビーム材 2 3 の端部は、各連結体 5 のアーム部 5 b とその下方に配置した補助アーム体 2 4 とで挟持固定されている。横ビーム材 2 3 はアルミ押出材であり、その断面形状は、図 9 に示すように、上下面に複数の突条部分 2 3 a ~ 2 3 b を有すると共に内部には複数の中空部 2 3 c ~ 2 3 d が形成された形態になっている。

【 0 0 4 3 】

この横ビーム材 2 3 の端部を前記アーム部 5 b と補助アーム体 2 4 とできっちりと挟持するために、アーム部 5 b の下面及び補助アーム体 2 4 の上面には、横ビーム材 2 3 に嵌合する溝が形成されている。

20

【 0 0 4 4 】

図 9 に示すように、アーム部 5 b と補助アーム体 2 4 とを挟持固定するためのボルト 2 7 の挿通用軸孔 2 8 が、アーム部 5 b 及び補助アーム体 2 4 の幅方向の両側に穿設されており、且つ補助アーム体 2 4 の下部側に雌ねじ部 2 9 が形成されている。補助アーム体 2 4 とアーム部 5 b とは、ボルト 2 1 で天板 2 の下面に固定される。

【 0 0 4 5 】

(2). 第 1 実施形態 (図 10 ~ 図 12)

次に、本願発明の具体的構成を説明する。図 1 0 ~ 図 1 2 では第 1 実施形態を示している。これは図 1 に記載した収納箱 B の吊支構造の例であり、図 1 0 は要部の正断面図、図 1 1 は取り付け工程を示す断面図、図 1 2 は変形例である。

30

【 0 0 4 6 】

この実施形態では、ブラケット手段 C は、脚 3 における上水平フレーム 3 b の内フランジ 4 5 a に上方から重なる一对の吊支体 6 1 で構成されている。吊支体 6 1 は、内フランジ 4 5 a に引っ掛かる鉤部 6 1 a を備えて正面視略コ字状に形成されており、左右の吊支体 6 1 は、下端 6 a は互いに付き合わさった状態で収納箱 B の上面板にビス 6 2 で固定されている。

【 0 0 4 7 】

左右の吊支体 6 1 は上水平フレーム 3 b に対してその幅方向にずれ不能に保持されており、収納箱 B はしっかりと固定されている。なお、吊支体 6 1 の長さが短い場合は、収納箱 B を前後複数の箇所です複数対の吊支体 6 1 で吊支すれば良く、ある程度の長さがあれば一对のみの吊支体 6 1 で吊支できる。

40

【 0 0 4 8 】

収納箱 B を上水平フレーム 3 b に吊支するに当たっては、図 1 1 に示すように、一方の吊支体 6 1 を予め収納箱 B に固定しておいて、一方の吊支体 6 1 を上水平フレーム 3 b に引っかけてから、他方の吊支体 6 1 をビス 6 2 で固定したら良い。一般には、机 1 の内部に位置する吊支体 6 1 を予め固定しておくのが、作業がし易いと言える。

【 0 0 4 9 】

図 1 2 に示す変形例では、左右の吊支体 6 1 の下片部に、上水平フレーム 3 b の下面に当接する上向き突部 6 1 b を形成している。この変形例では、収納箱 B は上向き移動不能

50

に保持されるため、取り付け強度においてより優れていると言える。

【 0 0 5 0 】

吊支体 6 1 は、上水平フレーム 3 b の左右両側に広がる形態とすることも可能であるが、図示の実施形態のように上水平フレーム 3 b の下面に回り込むコ字状の形態にすると、コンパクトで見栄えが良い。

【 0 0 5 1 】

(3). 第 2 実施形態 (図 13)

図 1 3 では第 2 実施形態を示している。この実施形態では付属物の例としてパネル P を採用している。ブラケット手段 C は、第 1 実施形態の吊支体と同様の形状の一对の押さえ体 6 3 と、パネル P の上端縁又は下端縁が嵌まる凸形で 1 本のエッジ材 6 4 とで構成されている。ビス 6 2 で押さえ体 6 3 とエッジ材 6 4 とを締結することにより、パネル P は前後動不能に保持される。

10

【 0 0 5 2 】

この場合は、ブラケット手段 C は上下の水平フレーム 3 b に取り付くことになる。押さえ体 6 3 とエッジ材 6 4 は前後方向に長い長さであっても良いし、両者とも短い長さであっても良い。パネル P の素材は様々であり、木製、アクリル板、金属板、合成樹脂板など様々のものを採用できる。パネル P は軟質材製として押しピンを差し込みできるようにしたり、或いは、ホワイトボードのように筆記可能とすることなども可能である。

【 0 0 5 3 】

(b) に示す例では、パネル P の上端と下端とに、板ばねや合成樹脂のような弾性を有する素材からなる係止片 6 5 を固定して、係止片 6 5 で上下水平フレーム 3 b の内フランジ 4 5 a を弾性的に挟持している。この例ではパネル P はワンタッチ的に着脱することができる。

20

【 0 0 5 4 】

(4). 第 3 実施形態 (図 14 ~ 図 16)

図 1 4 ~ 図 1 6 では第 3 実施形態を示している。図 1 4 は斜視図、図 1 5 は図 1 4 の XV - XV 視断面図、図 1 6 は図 1 5 の XVI - XVI 視図である。この実施形態では、付属物として棚板 T を採用しており、また、ブラケット手段 C は前後の縦フレーム 3 a に取り付けられている。

【 0 0 5 5 】

ブラケット手段 C は、図 1 2 の場合と同じ形状に形成されている左右一对のクランプ体 6 6 と、両クランプ体 6 6 にビス 6 7 で締結された逆 L 形の受け片 6 8 とから成っている。図示のとおり、クランプ体 6 6 は、縦フレーム 3 a の内フランジ 4 2 a に引っ掛かる鉤部 6 6 a を備えている。棚板 T はビス 6 9 で受け片 6 8 に固着されている。

30

【 0 0 5 6 】

この例では、受け片 6 8 を両クランプ体 6 6 にビス 6 7 で締結すると、両クランプ体 6 6 が縦フレーム 3 a に突っ張り固定されるように設定している。受け片 6 7 の固定用ビスとは別に、クランプ体 6 6 を縦フレーム 3 a に突っ張り固定するためのビスを別途設けても良い。

【 0 0 5 7 】

また、受け片 6 8 を使用せずに、棚板 T に前後の下向き片を折り曲げ形成して、この下向き片をクランプ体 6 6 に直接に締結することも可能である。縦フレーム 3 a の内周面に蟻溝を形成している場合は、蟻溝に嵌め入れたナットにビスをねじ込むことにより、棚板 T を高さ調節自在に配置することが可能になる。内フレーム 4 2 a , 4 5 a は係止条の一例であるが、他の係止条の例として、フレームの内周に蟻溝を形成しても良い。

40

【 0 0 5 8 】

(5). 第 4 実施形態 (図 17)

図 1 7 では第 4 実施形態を示している。この実施形態では、棚 T に下向きの足片 T 1 を一体に折り曲げ形成して、この足片 T 1 に、縦フレーム 3 a の内向きフランジ 4 2 a に重なるクランプ体 7 0 をビス 7 1 で固定している。すなわち、クランプ体 7 0 と足片 T 1 と

50

で内フランジ 4 2 a を挟み固定している。もちろん、棚 T は自在に高さ調節することができる。

【 0 0 5 9 】

【 0 0 6 0 】

【 0 0 6 1 】

【 0 0 6 2 】

【 0 0 6 3 】

(6). その他

本願発明は上記の実施形態の他にも様々に具体化することができる。

【 0 0 6 4 】

10

脚の側面形状は門形（鳥居形を含む）でも良い。また、本願発明は天板と脚との間に空間が空いていないタイプの机にも適用できることは言うまでもない。サーバのように外箱を有する物品の場合、ケースをブラケット手段にて脚に直接に取り付けることも可能である。また、ブラケット手段を机上面よりも上方に立ち上がる形態として、これに棚類を取付けることも可能である。

【 0 0 6 5 】

付属物としてパネルを取付ける場合、パネルは机上面よりも上方に立ち上がるサイドパネルの態様とすることも可能である。また、1つの脚に複数の付属物を取付けることも可能である。

【図面の簡単な説明】

20

【 0 0 6 6 】

【図 1】机の部分的な斜視図である。

【図 2】（ a ）は机の平面図、（ b ）は正面図、（ c ）は側面図である。

【図 3】図 2（ a ）の III-III 視一部切欠き正面図である。

【図 4】図 2（ a ）の IV-IV 視一部切欠き断面図である。

【図 5】連結手段の各部品の斜視図である。

【図 6】脚体のコーナ部の一部切欠き拡大断面図である。

【図 7】脚を構成するフレームの断面図である。

【図 8】脚用継手部材の斜視図である。

【図 9】図 5 の IX-IX 視断面図である。

30

【図 10】第 1 実施形態の要部の正断面図である。

【図 11】取り付け工程を示す断面図である。

【図 12】変形例を示す図である。

【図 13】第 2 実施形態を示す図である。

【図 14】第 3 実施形態の斜視図である。

【図 15】図 14 の XV-XV 視断面図である。

【図 16】図 15 の XVI-XVI 視図である。

【図 17】第 4 実施形態の平面図である。

【符号の説明】

【 0 0 6 7 】

40

1 机

2 天板

3 脚

3 a 縦フレーム

3 b 水平フレーム

4 2 , 4 5 脚を構成するフレームの内周部材

4 2 a , 4 5 a フランジ

B 付属物の一例としての収納箱

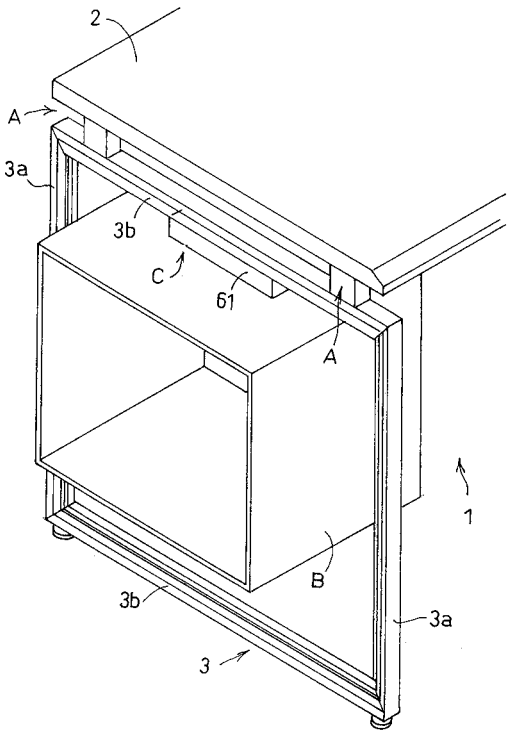
C ブラケット手段

6 6 ブラケット手段を構成する吊支体

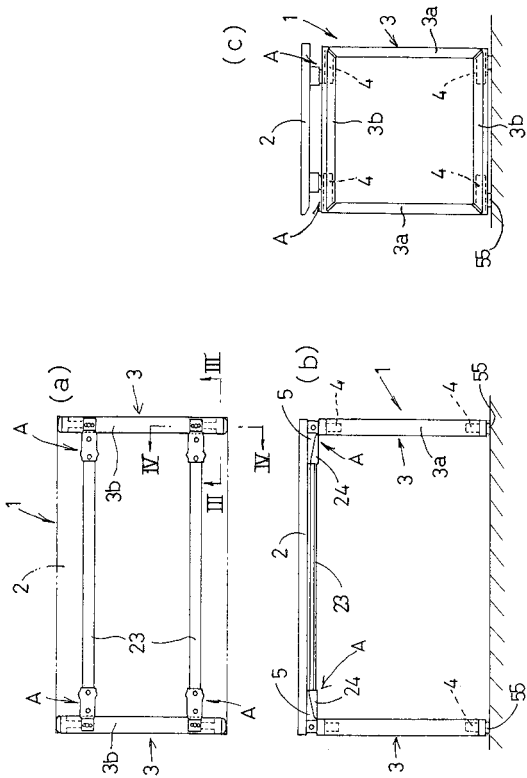
50

T 付属物の一例としての棚板

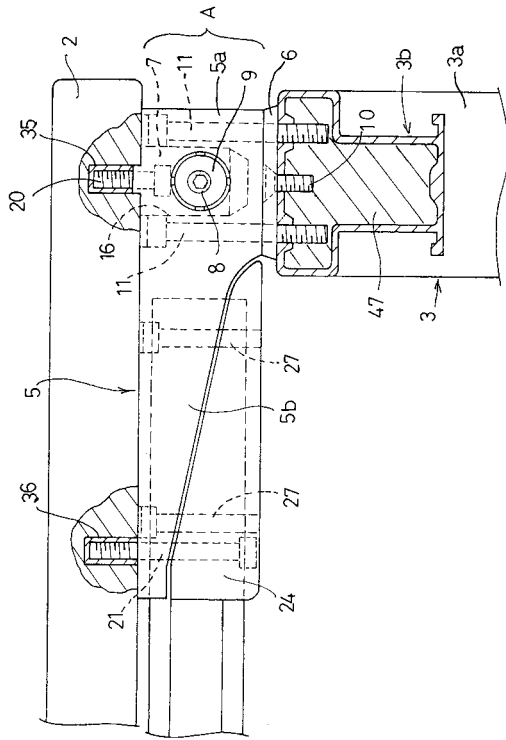
【図 1】



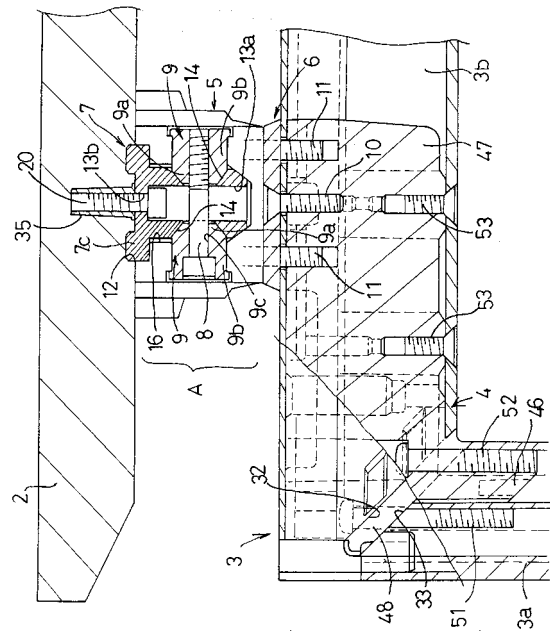
【図 2】



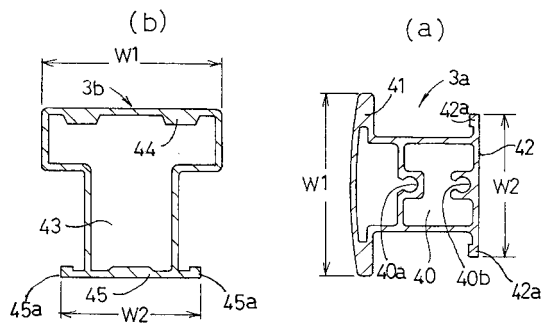
【図 3】



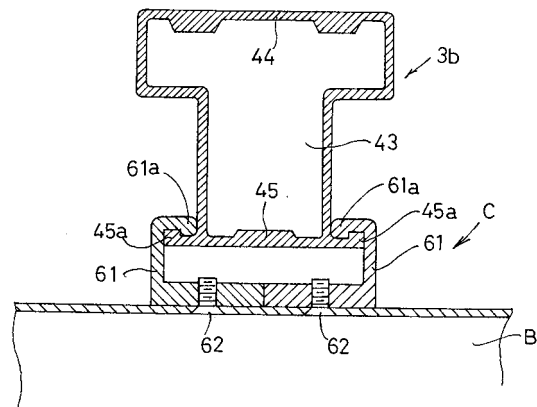
【図 4】



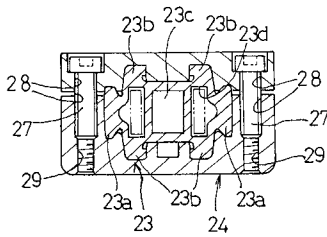
【図 7】



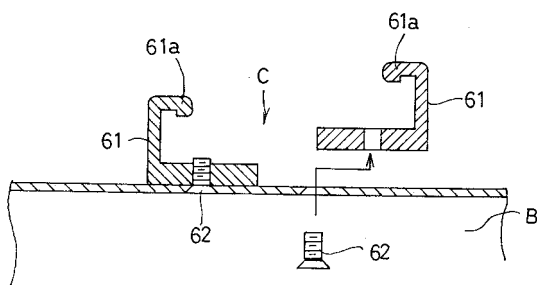
【図 10】



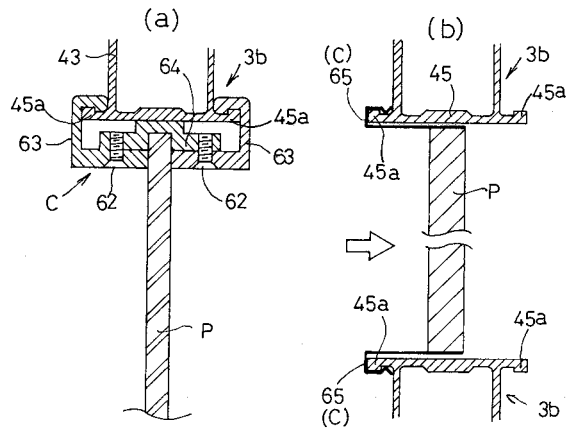
【図 9】



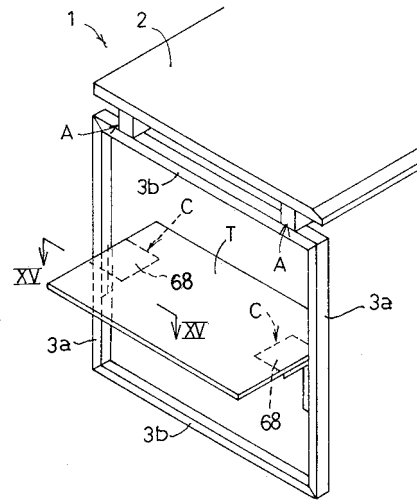
【図 11】



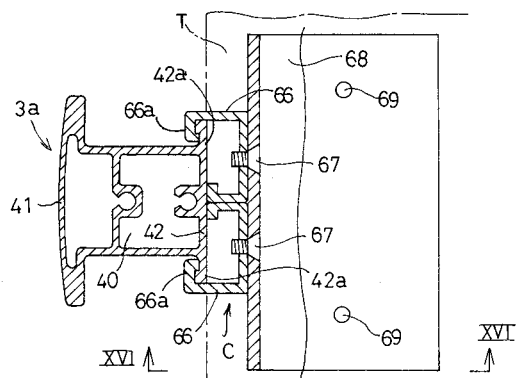
【図 13】



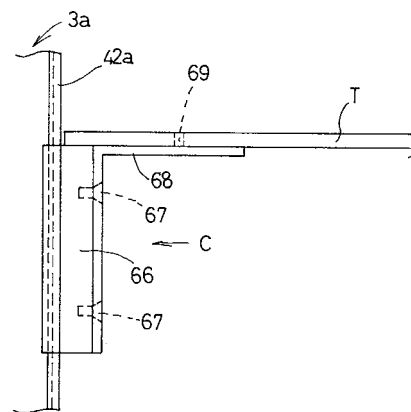
【図 14】



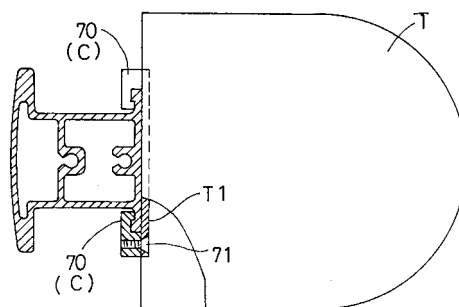
【図 15】



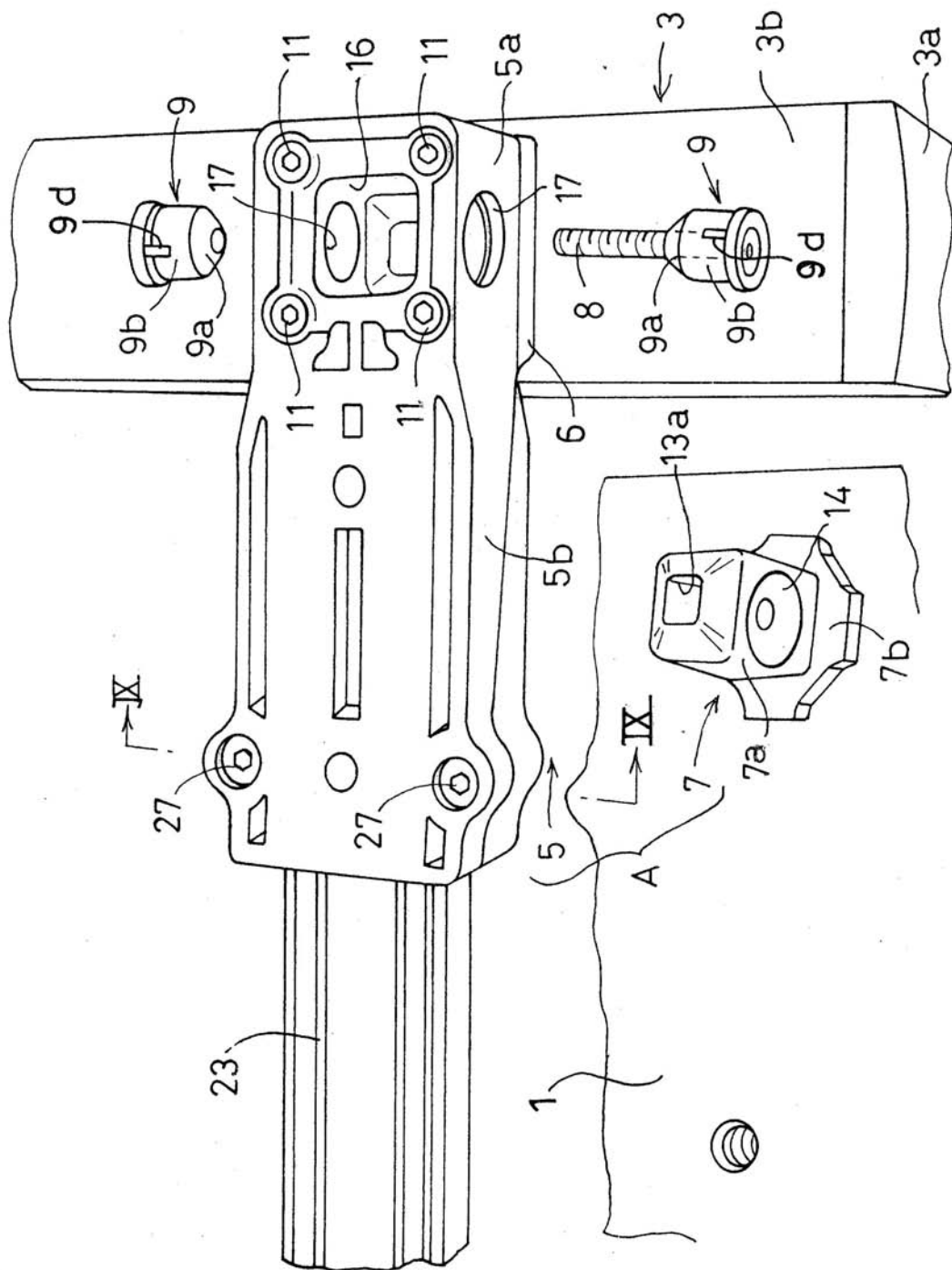
【図 16】



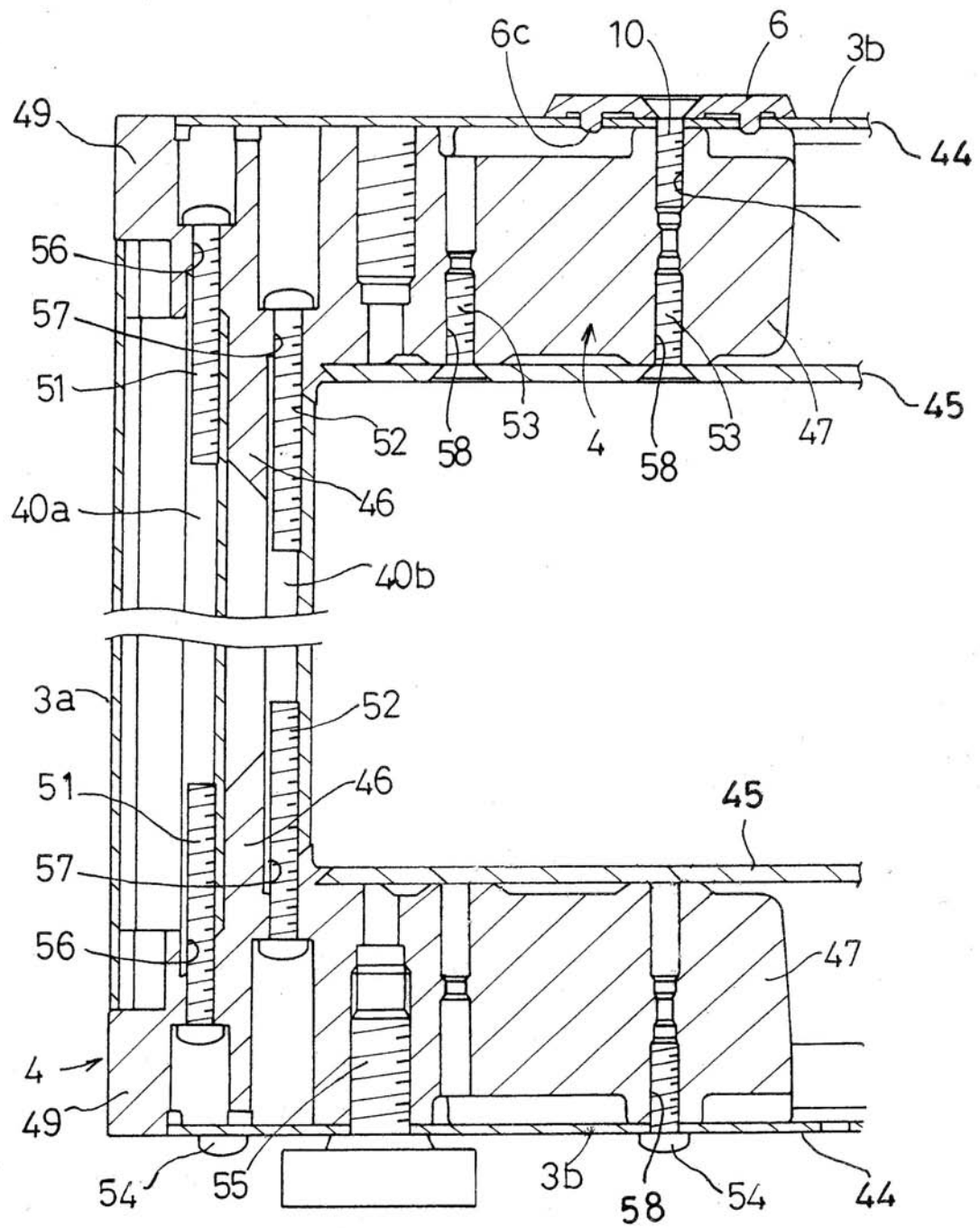
【図 17】



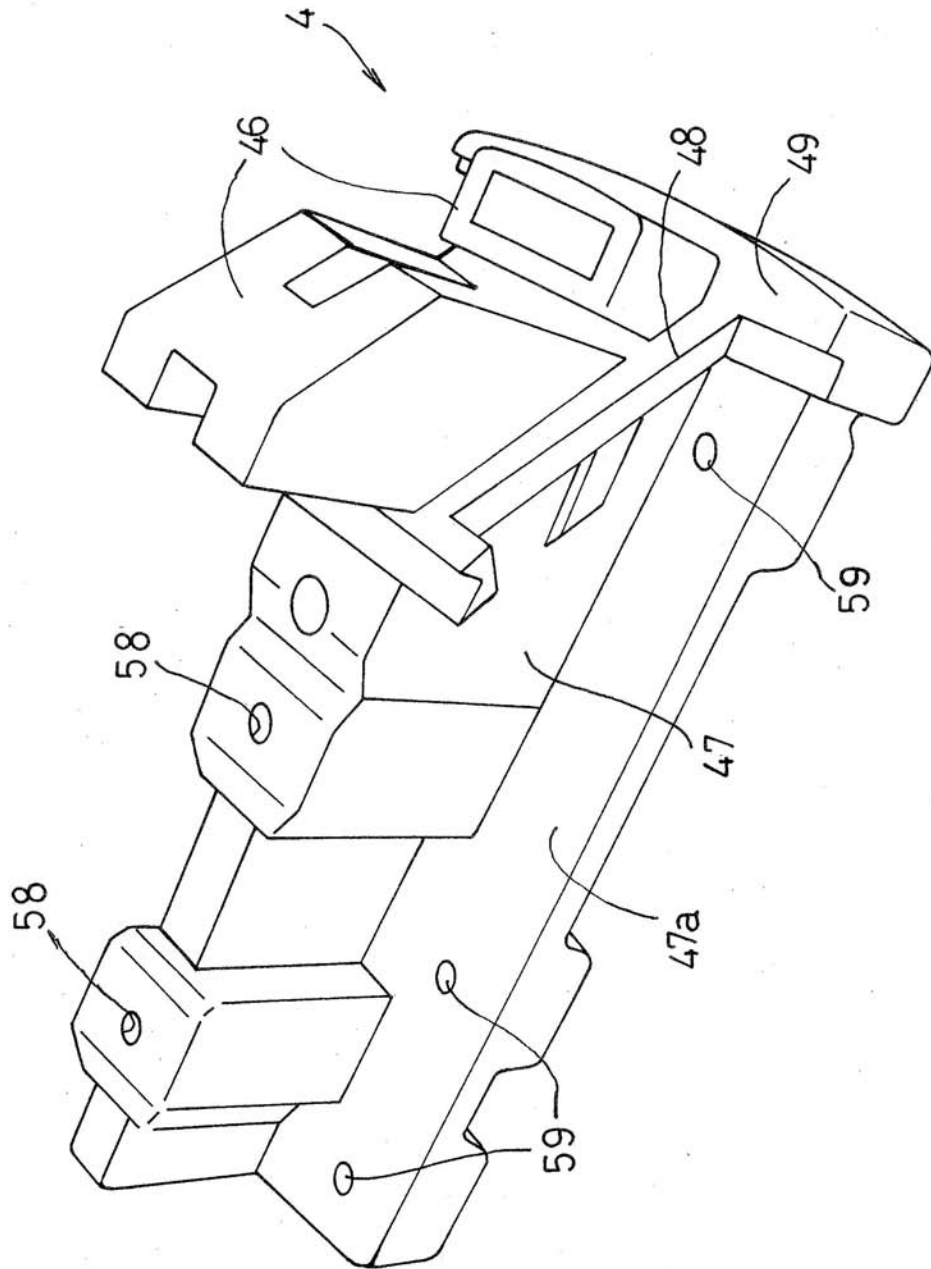
【図5】



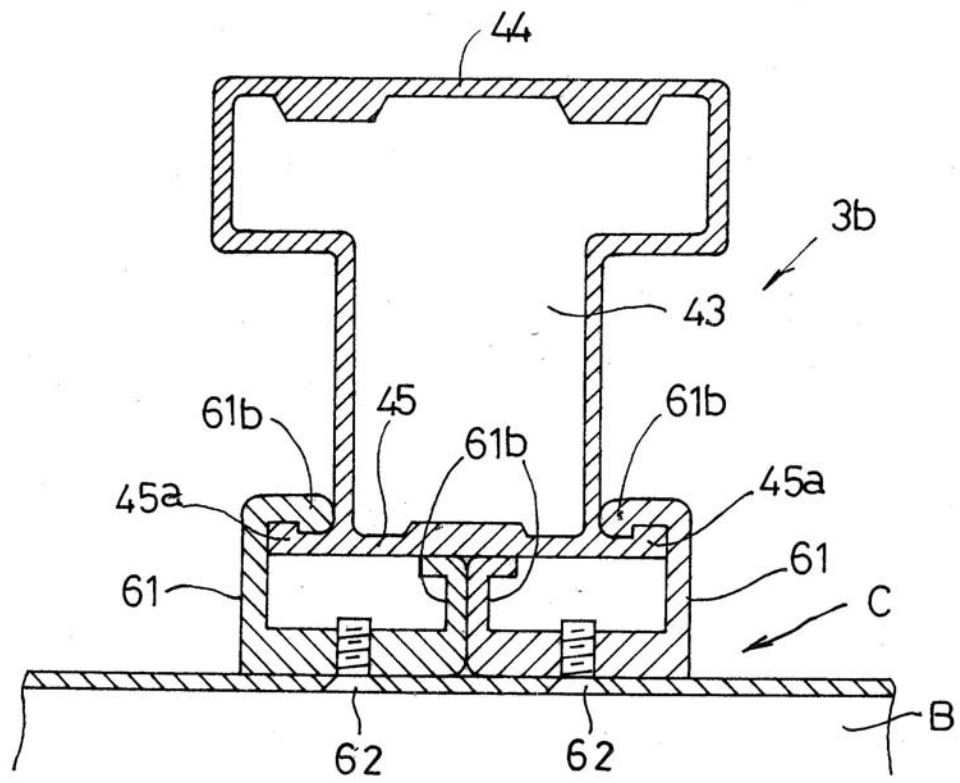
【図6】



【図 8】



【図 12】



フロントページの続き

(72)発明者 櫻井 多弥男

大阪市中央区淡路町1丁目6番11号 株式会社イトーキ 内

審査官 蔵野 いづみ

(56)参考文献 実開昭53-124849(JP, U)

実開平03-106997(JP, U)

実開昭58-139956(JP, U)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)

A47B 1/00 - 41/06